

## K's シャフト開発のエピソード

キャロウェイゴルフ社の元上席副社長(開発および事業戦略担当)  
リチャード・ヘルムステッター氏の著書「ゴルフの楽しみ方」(講談社より発売)より抜粋(本文のまま)

70歳を超えた時から力の衰えを感じていたアーノルド・パーマーは、もう少し軽くて振り切れるアイアン用シャフトを探して試していた。しかし、カーボンシャフトは色々と試したが、彼の要求に合うものはとうとうできなかった。だからといって、既存のスチールシャフトでは重くて振り切れない。

そこで軽量シャフトを開発している日本のメーカー二社に、より軽量でスチールシャフトの持つ番手間の飛距離の安定性をもつシャフトの開発を依頼した。

出来上がってきたのが現在日本バージョンのアイアンに装着されている島田シャフトの「K's-2001」であり、もうひとつは日本シャフトの「NS950GH」である。特にK'sシャフトは飛距離が出るだけでなく番手間の安定感も高いので、パーマーのお気に入りとなった。

彼のリクエストは軽量シャフトでありながらフィーリングがよく、8番アイアンで140ヤードを出せるもの。150ヤード飛ぶものは怖くて使えないというものだった。

現在アイアンにおけるスチールシャフトの回帰現象はパーマーの個人的な要望が基点となったものである。